

二学期の指導にそなえて

新入の子どもたちが、やっと幼稚園の生活になれて、元気にその本性を発揮し始めたと思うと、もう夏休み。秋の学期からは、あれこれと子どもたちの生活を思い浮べて、私たちの理想や抱負を実現できるような、いろいろの準備や計画を夏休みのうちにおきたいものです。そこで、ここに三人の方に、二学期の指導にそなえて、ということ、異なった観点から論じていただきました。

子どもたちの夢や

創造力を豊かに

加藤 清子

「先生おはよう」「おはよう」明るい声もはずみ夏休みがすんで登園する子どもたちは、久しぶりの幼稚園生活の喜びに、どんなにか胸をおどらせていることでしょう。

暑かった夏がすぎ、朝夕は大分涼しくなったものの、九月は夏休みのだせいで生活がだれないように、特に規則正しい生活態度を身につけることからすすめていきましょう。

温床生活ともいうべき一学期で、ようやく園生活も軌道にのり、

二学期こそは実りの秋にも似て、子どもたちが、心理的、身体的にも最も充実し、伸びる時でもありますから、夏休みの経験を、言語・絵画・製作・リズムなどに活発に表現させましょう。また、秋の自然界や、多彩な行事を通して情探を豊かにし、探究心を育て、うるおいのある人間性をたかめるようにみちびきたいと思えます。これらの指導については、各園にふさわしい、それぞれの保育計画にそって、行届いた教育がなされていることと思われまますので、ここではこの時期の子どもたちの成長過程や、生活活動の上から季節や行事を考慮して、特に重点をおきたい問題を主としてとりあげてみたいと思います。

さわやかな季節のこの頃は、子どもたちのポケットは、虫・石ころ・草花などでふくらんでいます。「これなあに？」などときかかれても、生来の生きもの嫌いから、自然科学的な面に関心を持たなかった私は、反省させられることがしばしばありましたので、夏休みに地質

学の講習に出てみました。四日間の講習ではありましたが、自然科学への眼が開かれたのは大きな収穫でした。子どもたちは、晴れた日の大半を砂場の遊びに、余念がありませんが、たんねんに固く丸めた土団子の上に、石をたいたり、けずったりして、粉にしたものを塗りつけてピカピカに光らせ、余った粉と一緒に宝物のように持ちかえります。時々「これ奇麗だね」などと見せてくれる小石も、今までは「ほんとなね」位ですませてしまい、これ程までに、子どもの生活と近いものを、とりあげてやらなかったことが後悔されました。そこで待ちかまえていて、子どもがひろってきた花崗岩をとりあげて、一緒に外部から観察したり、割ったりしながら問われるままに「皆さんにお名前があるように、この石にもお名前があるの。誰か知っているかしら？……みかげ石」というように話し合います。はじめて、花崗岩一家の家族構成をごく具体的に話してみました。皆よくきいていて「雲母さん」といった時は、「ウワァうんこだつてさ」と、たんにクラスの一部からかん声が上がったほどでした。「道端のこんなものと思うような石にもいろいろお話がありますよ。石はお話したいなあと思っていますから良く見ましようね。」と用意した花崗岩を子どもたちの机の上に置きしました。

あくる日からは閉口する位、沢山の石が集まりましたので、新米の地質学者はうれい悲鳴をあげて、幾度も地学の先生のところへうかがいにまいりました。それ以来、どこへ出掛けても珍らしい石をひろうようになりました。

「この石と、この石とすると火が出るよ」

「大理石は、かたいね」

「黒曜石と石炭は同じみたいだがちがうね」

「みかげ石はやわらかいよ」こんな発見もしました。また、「このお菓子チャートです。食べて下さい。しゃれたお菓子もあるんですよ、東京からとりよせて」。「先生これ、みかげ石ってお菓子です。」「小さいからみかげあられですか。おいしいことムシムシ」ままごにも発展しました。「先生、ここんとこ小ちゃくて良くわかんないや」といったことはいい機会に、虫眼鏡をとり出して与えましたが、余り子どもが喜ぶので、つい顕微鏡でものぞいたりしましたが、これは爪の垢を見せて生活指導にも役立ちました。

こんなわけで、ちょっと糸口を与えてやれば、子どもは自分で遊びを創造し、多くの尊い発見をします。しかし、その時々には示唆を与え、方向づけをするためには、豊かなものを私どもがもっていないければなりません。用意を充分にし、話しあいをしていくうちに、子どもたちからかえって教えられたり方向づけられたりして思わぬ収穫があります。不得手なものを積極的に打破することを私の反省もふくめて、特に感じました。おとなから見たらくだらないものでも、子どもには大切なもので、大きい夢をはぐくんでくれますし、それが観察力や創造力を豊かに発展させてくれます。子どもたちが自然と取組んでいる時、広い意味での学習をしていることを、父兄にもよく理解させたいと思います。

次に子どもたちのうれい行事の一つである遠足について話しましょう。自然に親しみ、野外へ出る機会が多くなりますから、季節の推移や、自然の美しさに眼を向け、石、草木などに関心をもつようになりましよう。

「先生、いねが、こんにちわ、こんにちわしているね」

「汽車が、どっこいしょ、どっこいしょっていつてるよ」

「い、おりのおなか、夕焼みたいにきれいだね」道を歩きながら、または折にふれてボツンと言う子どもたちの、詩情にあふれた新鮮な表現に、ハット驚かされることがあります。これらのことばは瞬間的なもので、活動的な子どもたちはすぐ忘れて、次の遊びに没頭します。すぐ消える虹のように美しいものだけに、その美しさに心をとめたいと思います。子どもたちのことばに耳を傾け共感してものの感じ方やとらえ方を、情操にまで大切に伸ばしたいのです。また、園外保育に利用する乗物などにより交通道德をやしなひましよう。

遠足につづいて運動会も秋のうれしい行事の一つです。楽しい運動会にそなえて、九月末頃から、徐々に、いろいろの競技や、リズム遊びの規則を理解し、守るように指導し、協力的に参加する態度をたかめていきましょう。みている時、出場、退場の時も立派に見えるよう、ころんでも泣かないで、おしまいまでやりとげるように指導しましょう。出場種目はすくな目にして、健康管理の上からも疲勞しないように無理な計画は、さげましょう。なお、プログラムの最後を、皆の知っている親しみのある曲をえらび、その場で全員が親の手をとって興じられるスクエアダンスで運動会を終わりにいたしますが、大変効果的です。

つづいて、言語指導を申しますと、まず夏休み中の生活発表をする機会に、短かくてもおしまいまで、はっきりお話ができるように注意しましょう。そして「先生おしっこ」と言うような一口ことばをなおすようにつとめましょう。きく態度・話す態度・姿勢などに注意して、やがて協力して劇あそび・ごっこ遊びのように一つのものを完成して、皆の力でもりあげるようになっていきたいと思います。

す。言語に関連して絵本の扱い方の一例として、画面の内容を子どもから話してもらうことも必要です。先月も笑みくずれそうなお母様が子どもの内緒話を聞いているところを開き、「この坊やお母様に何をお話しているかしら先生ききたいわ」とたずねましたら「先生ぼく」「あたし」と一人ずつ出て来て画面の子どもにそっくりな恰好で内緒話をしてくれました。くすぐったい耳をがまんしながら聞いていますと、「あのね、お母様犬小屋つくりましようって」「幼稚園へつれていってね」「アイスクリームかってね」このようなことは、子どもの要求心や心の動きを知るきっかけになりますし、これから先どうなるか、この絵の前にはどういふことがあったかなど、お話させることにより、想像力の芽生えに役立つばかりでなく、願望や不満のような内的生活をしることができ、かくされた心のゆがみも直すことに役立ちましょう。

●九月
なお、最後に全般的の指導について各月の大きな目標を簡単にのべたいと思います。

●十月
夏休み中の不規則な生活をなおし、あと戻りした子どもに注意し、徐々に観察・工夫・創造力の芽生えを伸ばすように環境をととのえましょう。とくに残暑の健康管理に留意することが大切です。

●十月
園外保育・競技などで自主心や協力をやしなひたい、強い体力をつくるように健康増進にはげみたいと思います。うれしい行事が多く心身ともに浮きたち、とかく落付きを欠きやすい点に留意したいものです。行事のための保育にならないようにきをつけましょう。とくに園外保育では、公德心をやしなひたい、目的での遊びや、お弁当

の後始末、きめられた範囲内で遊ぶこと、などを体験を通して理解させましょう。

●十一月

多彩な行事から落付きをとり戻し、冬への基礎をつくるように努力しましょう。また、やりかけたことは終りまでなしとげるように指導しましょう。収穫期をひかえて、働く人々の様子を見学させて、勤労の尊さも指導したいものです。それとともにできることは、喜んでお手伝いする態度を育てたいと思います。

●十二月

寒さにまけない強い体力をつくるよう、冬の衛生に注意しましょう。室内遊びが多くなりますから、特に換気に注意しましょう。暖房をかこんで楽しい集りが多くなります。多くの行事や、豊富な生活経験が、深みゆく秋とともに実を結び、初冬のこの頃にかけて子どもたちも心身共に伸びて、全般的にレディネスがたかまっていますから、外部に集中する眼を内に向けてよにみちびきたいものです。自分の行いを反省する態度もつけていきたいものです。また、音楽の遊びの中に劇あそびやリズムあそびをとりあげて、自然な形のうちに子どもたちの創意を生かした発表会ができるように、集団生活の中で協力し、また自己を充分に發揮できるようにみちびきたいと思ひます。そして、お正月を迎えるたのしい準備のうちに二期を終りにしたいものです。(筆者は松本市立松本幼稚園教諭)

一学期の反省と夏休み

杉 本 陽 子

園庭の桜の花が咲きそろった四月、新入園児を迎え入れて、それからの一日一日を家庭の赤ちゃんから幼稚園の子どもに早くなれるように、お互に努力しあい、やっと特別の子どもを除いては、新しい環境に適応するようになったと思つた頃、もう夏休みが眼の前に迫っているのに驚かされます。そんな時、やはり二学期こそ期待をもって迎えられるという気持がしますが、事実また、二学期の子ども姿には、入園の頃の緊張感や不安定さなどは影を消してしまつて、いかにものびのびとした様子がみられます。とくに、二年目の秋を迎える年長組の子どもたちが、もうすっかり園の生活を自分のものにして、恵れた自然の中で、自由に活発に過す姿を見るのは楽しいものです。そこで、こうした学期を最も有意義に過すために、なれない一学期や、卒業進級を控えて心忙しい三学期とは、また違った意味での準備や心構えが、私たちの側にも必要となってくるのは当然のことでしょう。まず、二学期を考える時、そこに横たわる大きな問題として、夏休みというものが浮びあがってきます。やつとなれたと思つた幼稚園とも、夏休みになれば、しばらくの間、離れなければなりませんので、子どもたちにとつても私たちにとつても、園生活をこのまま続けていくのとは異り、そこにいろいろの問題が提出されてきます。そこで、それらの解決をするともに、で